

## 小型三角窯の 窯焚きを終えて

清水志郎

陶芸家



三角窯は小さいにもかかわらず、焚口が2箇所ある。何かしら効果を狙ったからだと思われる。みつかっていないので、煙突はなかった可能性もあるし、ただ残っていないのかもしれない。なので、まずない状態からはじめた。焚口も、現代なら蓋をしてロストルを作るが、その痕跡もみつかっていないので、ない状態から。燃料は周辺の雑木とクヌギを、現代の薪のサイズに。最後に使う松の薪を20束と、径20センチくらいで長さ20~30センチの杉の半割も用意。

焚きはじめて5時間たつのに500°Cを超えていないことに焦りはじめ、薪の量を増やしてみると、炎が中に入っていないことが気になる。引きが弱すぎる。煙突なしではこうなることは予測していたため、工夫をはじめた。薪を中に突っ込んで焚くほどの燃焼スペースがない。炎が入るように、焚口いっぱい薪と半割杉を入れる。焚口が2つあると、熱がどちらかから逃げやすいので、交互に焚くようにする。片方の焚口に蓋をするため、薪で木蓋をする。片方に木蓋をすると、その時はよいが、交代する時に、木蓋を燃やしきれていない。その木蓋を崩して、少し奥へ入れて焚く。うまく燃えていない。つまり燃えていない死んだオキをためてしまうことになっていた。つまるところ、上がらない。

600°Cから下がり始める。煙突もロストルもない。燃え切りを待つか、掻き出すか考え、燃え切りには時間がかかり過ぎると判断し、2つの焚口から、それぞれ約50キロのオキを掻き出した。態勢を立て直

し、薪で簡易にロストルを作り、大きい薪を入れるのはやめて、割り木だけに戻した。オキをならしながら。

薪でロストルを作っていたが、3、4回焚くと崩れるので、その薪に粘土を巻いて防火する。マシにはなるが崩れるので、石に変える。800°Cまでは上がったが、また停滞する。そこで、煙突を作りはじめる。煙突をいっきに積むと、根元が崩れてきたので積み直し、高さ45センチにとどめる。900°Cには達していなかったが、上げ止まりを感じ、薪を松に切り替える。その間も、何回かにわけて煙突を高くし、60センチくらいになった。

結局、1000°Cまでは上がったが、松20束では足りず、竹を試し、細割りを試し、木蓋トントンを試し、煙突を細くしてみたり。そうこうしている間に、温度は急降下。その時点で朝の3時。閉塞の体力を考え、今回はここまでにした。そこから、煙突を土で塞ぎ、焚口いっぱい雑木を入れて土で塞いで、完全に閉塞した。

今回は、現代の焚き方に囚われず温度を上げようとしたが、結果的にロストル、煙突、松に頼ることになった。そこに至るまでもう少し工夫があったかもしれない、もしくは自然とそうなる流れがあったのかもしれない。結果的に、20時間かけて1000°Cしか上がらなかったが、1回目としての収穫は充分で、次に繋がる結果だと思う。

